

- 1 課題名 日本周辺国際魚類資源調査委託事業
- 2 区分 受託
- 3 期間 平成18年度～
- 4 担当 企画情報部 (小久保友義)
- 5 目的

平成12年(2000年)9月に我が国周辺海域を含めた中西部太平洋における高度回遊性魚類資源の国際管理を目的とする条約(WCPFC)が採択され、平成16年6月に発効された。平成17年7月に日本も本条約を批准し加盟国となった。

本事業は当該資源の安定的な利用確保のため、科学的データの整備を目的としている。

なお、本事業は水産総合研究センターからの再委託を受け、遠洋水産研究所を中心に全国的な組織で実施された。この内、本県はカツオやマグロ・カジキ類の水揚状況や各魚種の生物特性の調査を行った。

6 成果の要約

(1) 試験の方法

カツオについては、ひき縄漁での水揚量が多い串本、すさみ、田辺市場の伝票を整理し、水揚量調査を実施した。また、串本市場では、ひき縄漁で漁獲されたカツオの体長を測定した。

マグロ・カジキ類については、指定港である勝浦市場の伝票を整理し、水揚量調査を実施した。また、まぐろはえ縄漁で漁獲されたマグロ・カジキ類の体長と体重を測定した。なお、体重については、勝浦漁業協同組合職員が測定したものを調べた。

(2) 成果の概要

ア カツオ漁況

串本、すさみ、田辺市場のカツオ水揚量は、2006年1～2月には51トンで、比較的好調な漁で始まった。しかしながら、盛漁期となる3～5月には425トンで、1993年以降では13位と極めて不漁となり、黒潮が大蛇行した昨年を21トン下回った。その後、8～12月の水揚量は16トンで、1992年以降では6位

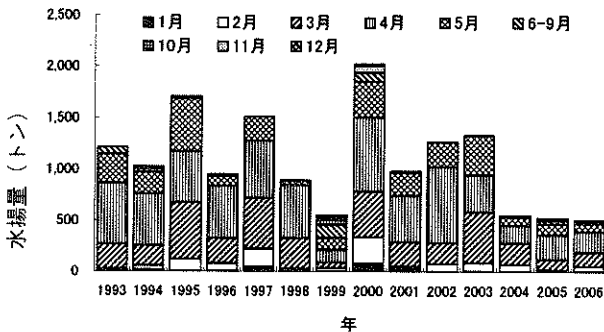


図1 ひき縄漁による串本、すさみ、田辺市場におけるカツオの水揚量の月別経年変化

とやや好漁となった(図1)。1～5月のカツオの尾叉長組成は、39～47cmにモードをもつ小型魚が主体で、52cm前後にモードをもつ中型魚もみられた。

イ マグロ類漁況

勝浦市場のマグロ類水揚量は、クロマグロ(成魚)が、2005年に437トンで、近年では最高となったものの、2006年には162トンで、2001年に次いで少なかった。キハダ(キハダ+メジ)は、1999年以降減少傾向が続く、2006年は1,502トンになった。特に7～8月に多いことが特徴である。メバチ(メバチ+ダル)は、1,500トン前後で比較的安定しており、2006年には1,868トンで、この内3,11～12月に多かった。ビンナガは、1999年以降減少傾向が続く、2006年には6,234トンで、2004年に次ぐ少ない水揚となった(図2)。また、2006年のクロマグロは125～160kgに

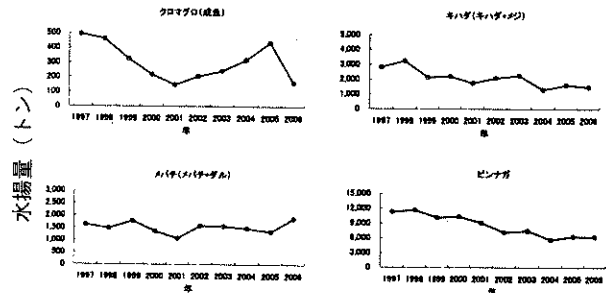


図2 近海、沿岸まぐろはえ縄、その他はえ縄漁による勝浦市場におけるマグロ類の水揚量の経年変化

モードをもつ群が主体となり、175kgと200kg前後にモードを持つ群もみられた。キハダは50～167cmの魚体が水揚され、102～125cmにモードを持つ群が主体となった。メバチは47～182cmの魚体が水揚され、78～89cm、96～104cmにモードを持つ群が主体となり、130～150cmにモードを持つ群もみられた。

ウ カジキ類漁況

勝浦市場のカジキ類水揚量は、クロカジキが最も多く、メカジキ、マカジキと続き、この3種で大部分を占めている。

7 成果の取り扱い

(1) 成果の普及

成果報告会等で曳縄漁業者へ水揚状況等を普及した。また、各種データは遠洋水産研究所およびエヌ・ユー・エス株式会社に送付した。

(2) 成果の発表

平成18年度日本周辺国際魚類資源調査委託事業報告書、平成18年カツオ資源会議報告書、平成18年度ビンナガ資源来遊動向検討会報告書